

令和 2 年 6 月 12 日現在

機関番号：14403

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2019

課題番号：15K04429

研究課題名（和文）日本の伝統工芸を取り入れた生涯教育に導くモノ教育プログラムの構築

研究課題名（英文）Construction of an Art Education Program Leading to Lifelong Education Through Building and Creating Japanese Traditional Crafts

研究代表者

松井 祐 (Matsui, Yuu)

大阪教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：10290537

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ものづくりの実践研究を通して、モノの理解を深め、つくる楽しさや面白さを実感し、自ら学ぶ力を育む生涯教育をめざし、指導方法の構築を行った。

ものづくりの実践研究では、地域の子育て支援施設と連携・協力し、4年にわたり25回のものづくり講座を実施し、小学生や指導者など約300名が参加した。ものづくりでは、五感を働かせ素材について学ぶ体験的な学習を取り入れることが効果的であることが明らかとなった。また、その成果として、1素材の理解を深める「身近なモノの比較本」、2日本の伝統工芸を紹介し、その素材や加工方法を取り入れたモノづくり教材「伝統工芸から学ぶモノづくり」の2つの教材を編集・作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

幼少期からのモノづくりは、感覚機能を刺激し身体機能の発達や豊かな情操を養う。また、感覚機能を重視した指導によるモノづくりの成功体験は、生涯にわたりモノづくりの楽しさや喜びを味わうきっかけとなることが期待できる。

本研究は、伝統工芸に着眼し、学校と地域社会の連携により、生涯教育へとつなげる取り組みであり、身近な公共施設等を活用することで実現できる萌芽的性格を有するものと考えられる。また、教材は、地域の子育て支援施設だけではなく、学校、PTA文化教室、生涯学習ルームなど世代を問わずモノづくりに関わる至るところで活用できるため社会的意義が高いと言える。

研究成果の概要（英文）：Through practical research of building and making crafts, a teaching method was constructed aimed at deepening understanding of materials, realizing the fun and satisfaction inherent in building and creating, and fostering the ability to learn by oneself for lifelong education.

In co-operation with local child-rearing support facilities, close to 300 people including elementary school students and instructors participated in 25 crafts-manufacturing classes over the course of four years. It became clear that in a practical manufacturing class, incorporating experiential learning involving the five senses to learn about materials is effective.

In addition, as a result of the research the following two teaching materials are edited: (1) "The Book of Comparing Familiar Things" for deeper understanding of materials, and (2) "Learning Manufacturing Through Traditional Crafts" which introduces traditional Japanese crafts through materials and method of production.

研究分野：教科教育

キーワード：伝統工芸 モノづくり 図画工作 工芸教育

### 1. 研究開始当初の背景

申請者は、これまで地域の子育て支援施設と連携協力し、小学生を対象としたモノづくり講座などを実施し、教材研究、教材開発を重ね、実践を通して効果的な指導法の研究を行ってきた。講座では、子どもたちのニーズに合わせ、モノがどのようにつくられているかを理解し、成功体験を味わうことができるモノづくりをめざし、モノづくりを通してつくる楽しみやさまざまな素材に触れ、素材の特徴について理解することを目的に取り組んできた。しかし、日本の伝統的工芸にかかわる学習や身近なモノ学習などモノ教育が不足していたため、それらの内容を取り入れ、さまざまな公共施設で有効活用できる教材集の必要性を感じていた。

教材研究、開発では、身近にあるさまざまな素材を用い、多様な表現技法を組み合わせながら、新しいモノづくりを研究してきたが、モノづくりの基本的な技法は伝統的な技法に通じるところがあると感じるようになった。これらの活動を通して、各都道府県で実施される伝統的なモノづくり講座にも関心を持ち、調査、研究を行い、伝統工芸のモノづくり体験を通して、子どもたちにも昔から引き継がれてきた優れた伝統を伝えることができないかと考えるようになった。

そこで本研究では、各都道府県の伝統工芸に関わる施設等を訪問し、伝統工芸士や職人、指導者などに話を聞くことによって、その現状と課題について調査し、普及や発展、後継者問題など伝統工芸が絶えることなく継承され、子どもたちをはじめとし、一般の人々に伝統工芸を伝える方法などについて調査し、研究に着手することになった。

### 2. 研究の目的

モノづくりを通して生涯教育に導く研究(図1)を全体構想として掲げ、これまで子育て支援を中心にモノづくり講座を実施してきた。これらの研究を礎とし、本研究では、現役世代・生きがい支援にまで対象を広げ研究する。

これまでの講座では、モノづくりを楽しみ、講座の内容に関わる身近なモノに関しても学習する機会を取り入れてきた。しかし、その学習には効果的な教材集が必要であると感じ、本研究では教材集を発行し、モノづくりに関わるあらゆる場所で普及・活用されるよう、HPで公開・配信し、指導者の育成講座にも取り組む(図2)。

教材集は、素材の理解を深めることを目的とし、教材集は、日本の伝統工芸を紹介し、その素材や加工を取り入れたモノづくりを提案、編集する。国民がモノづくりの楽しさに触れ、モノに対する知識の充実を図ることをめざす。

モノづくりを通してモノの理解を深め、生涯教育へ導く研究プログラムの全体構想を図1「モノづくりによる生涯教育プログラムの全体構想」、本研究の構想を図2「本研究の構想図」に表した。

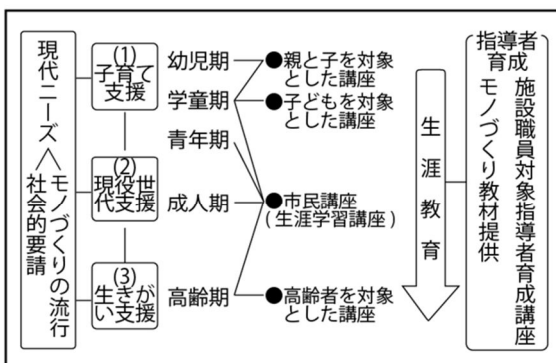


図1. モノづくりによる生涯教育プログラムの全体構想

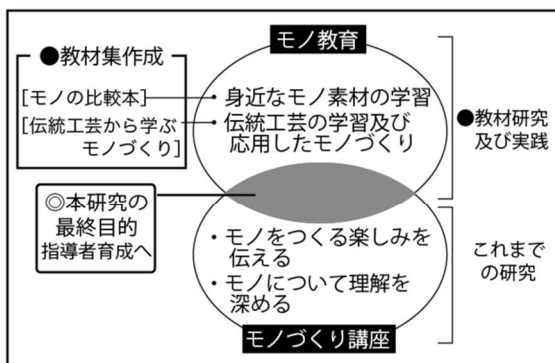


図2. 本研究の構想図

### 3. 研究の方法

本研究では、次の項目について取り組んだ。

(1) 実際に実物を用いて類似する素材や加工の理解度をはかる実験を行い、現代人がどの程度正確にモノを見分けているかを検証する。

(2) 類似する身近なモノを取り上げ、感覚機能(五感)を働かせて比較することができる教材研究を行い、モノづくり講座で活用する教材の作成、編集を行う。[教材:モノの比較]

(3) 日本の伝統工芸を紹介し、その素材や加工を取り入れ、現代のニーズに合わせたモノづくりの教材研究を行い、モノづくり講座で活用する教材の作成、編集を行う。[教材:伝統工芸から学ぶモノづくり]

(4) 日本の伝統工芸の現状や課題を把握し、教材開発を目的に文献調査、伝統工芸士や職人への聞き取り調査を行う。

(5) モノづくり講座を開催し、作成した教材の活用、アンケート調査の実施、その教材内容を検証し、実践方法や教材集の改善につなげ、モノづくりの普及、発展に取り組む。

### 4. 研究成果

(1)

現代人が身近なモノに対してどの程度理解できているのかについて、類似する素材や加工の理解度をはかるため、観察及び聞き取りによる個別の調査を実施した。調査では、1「陶器」と「磁器」、2「天然皮革」と「合成皮革」、3「ガラス」と「アクリル(プラスチック)」、4「羊毛」と「木綿」、5「あみ物」と「おり物」、6「和紙」と「洋紙」の6項目の実物を見て観察し、正確に見分けられるのかを確認し、素材を見分ける要因について分析した。また、主観的な判断と合わせて、現代人のモノに対する感覚的な判断力を確認し、今後のモノづくり教育に必要な内容や指導について考察し、教育活動へどのようなアプローチが必要かを検証した。

その結果、意識調査よりも、実物を用いた視覚による調査、五感による調査へと進むにつれ、より多くの感覚機能を働かせている傾向がみられた。このようなモノへの認知度を問題視し、学習にも積極的に取り入れることで、早期にモノへの知識が生かされるだけでなく、将来社会においてモノの技術的な発展や応用がさらに横断的に考えられるようになることが期待できることが確認できた。また、素材を学習する際は、類似する素材を複数用意し、五感を働かせ、モノの知識を同時に学習し、体験的に比較する取り組みが効果的であることも明らかとなった。

(2)

身近なモノや工芸品などについて、使用される材料や加工技術、価値観などの理解を深めることを目的に実施した。また、子どもから大人がモノづくりを身近に感じられるよう配慮し、文献調査と素材などの収集を通して、素材、用具、制作工程などさまざまな視点から教材集の素材として使用できる内容について検討した。その成果として伝統工芸モノづくり講座で、感覚機能(五感)を働かせて比較することができる「モノの比較」教材を作成し、実践研究で活用することができた。

(3)

東京都、神奈川県、石川県、富山県、福井県、愛知県、三重県、大阪府、奈良県、香川県、福岡県などの伝統工芸を視察し、注染、染色、ガラス、鼈甲、竹工芸、漆器、和紙、織物、組み紐、蒔絵、沈金、高岡銅器、高山茶釜、大阪金剛簾、織物などの素材や用具、制作工程を記録し、伝統工芸に関する資料収集を行った。

これらの資料をもとに、小学生を対象とした教材集「伝統工芸から学ぶモノづくり」教材および、動画を活用した ICT 教材を作成した。また、これまで調査研究で訪れた伝統工芸のイベントにおけるモノづくり体験の取組や内容を論文にまとめ報告した。

(4)

伝統工芸士等への聞き取り調査では、「蒔絵」、「友禅」、「竹細工」、「江戸小紋」、「更紗」、「江戸鼈甲」、「江戸風鈴」、「江戸切子」、「江戸簾」、「伊賀組紐」、「高岡漆器」、「高岡銅器」、「丸亀うちわ」など、各伝統工芸に携わる伝統工芸士や職人等から、伝統工芸の課題、素材や制作工程、普及・発展など 16 項目の内容について個別の面談による聞き取り調査を実施した。その結果、次のことが明らかとなった。

伝統工芸を志す人は多いが、伝統工芸を知る、触れる機会が関係しているため、家業である環境が大きく影響している。また、伝統工芸に興味がある人でも、簡単に入り込める世界ではなく、収入面での厳しい選択が課される。そのため、積極的に後継者や弟子を受け入れることはせず、親族である子どもへと継承する割合が高いため、後継者不足に陥りやすいことが要因として考えられることが明らかとなった。

伝統工芸に携わり一人前になるにはかなりの年数がかかり、修行もたいへんそうであるというイメージが先行し、なり手がいないという若者の職業志向を問題視する傾向が、筆者も含めて感じている伝統工芸士や職人が多いことも確認できた。

伝統工芸を後世に伝えていくためには、伝統工芸士や職人が仕事に専念でき、ある程度安定した収入の確保が保証され、伝統工芸の良さを伝える PR が連携しあわなければならない。まず日本に住む日本人がわが国の伝統工芸について学習できる環境が必要であることも認識できた。

(5)

モノづくりの実践研究では、地域の子育て支援施設と連携・協力し、4年にわたり 25 回のモノづくり講座を実施し、小学生や指導者など約 300 名が参加した。日本の伝統工芸の内容を取り入れた「伝統工芸から学ぶモノづくり」の取り組みとして、「染色：ハンカチ染め体験」、「江戸風鈴：風鈴の絵付け体験」、「壺屋焼：シーサー作り体験」、「大阪金剛すだれ：すだれのティーマットづくり体験」、「水引：水引の箸袋とポチ袋づくり体験」、「くみひも：くみひものキーホルダーづくり体験」などの講座を実施することができた。また、これらの活動内容は HP で公開することができた。特に、伝統工芸から学ぶモノづくり講座では、五感を働かせ素材について学ぶ体験的な学習を取り入れることがその後の活動に効果的であることも実践研究を通して明らかとなった。

本研究は、平成 27 年度から平成 31 年度の 5 年計画で研究を行う予定であった。研究が 4 年目に入った段階で、伝統工芸モノづくり講座の実践研究は、紙ベースの教材に加え、当初研究計

画にはなかった伝統工芸士の巧みな技やこれまでの調査から得られたつくり手の思い、材料や用具、制作工程を理解するワークシート、画像や動画をまとめた **ICT** 教材として活用するまでに至った。プレ実践の結果、**ICT** 教材の導入が予想以上に制作意欲に与える影響は大きく、アンケート調査からも、理解度や技術力が高まり効果的であることも明らかとなった。

また、教育の情報化により携帯電話やタブレット端末が普及し、**CD** ドライブが搭載されていないパソコンも普及し、パソコン用ソフトもパッケージ版からダウンロード版、ソフトからアプリへと移行しつつある。そのため作成予定の教材集や **CD** などが有効活用されないなどの課題もみえてきた。

そこで、5年目の教材集の公開をふまえ、これまで進めてきた研究内容を発展させ、学校、地域、社会をつなぐ「**ICT** 教材による伝統工芸・伝統文化を取り入れた図画工作教育プログラムの構築」として新たに研究したいと考え、平成 **30** 年に研究計画最終年度前年度応募をしたところ新規採択された。

そのため、これまで作成、編集した「モノの比較本」および「伝統工芸から学ぶモノづくり」教材は、新学習指導要領に対応した教材を検討する、幼小接続に対応した伝統文化・伝統工芸教材の充実を図ることで、学校教育、学校外教育にも対応した、**ICT** 教材「伝統工芸・伝統文化を取り入れた図画工作教育プログラム」として充実させ、今後はさらに新しい教材を考案し、加筆・修正、再編集を行い、**HP** で公開・配信する予定である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 松井祐	4. 巻 第21号
2. 論文標題 日本の伝統工芸に関する調査研究 -伝統工芸のイベントにおける体験活動について-	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大阪教育大学「実践学校教育研究」	6. 最初と最後の頁 79-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松井祐	4. 巻 26
2. 論文標題 伝統工芸に関する調査研究 聞き取り調査にみる伝統工芸の現状と課題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 基礎造形026	6. 最初と最後の頁 49-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松井祐他	4. 巻 第20号
2. 論文標題 土絵の具の表現活動における指導法	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 大阪教育大学実践学校教育研究	6. 最初と最後の頁 29-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松井祐	4. 巻 25
2. 論文標題 土絵の具の表現活動について	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 基礎造形025	6. 最初と最後の頁 51-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松井 祐	4. 巻 第19号
2. 論文標題 図画工作における墨による表現活動について	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 大阪教育大学実践学校教育研究	6. 最初と最後の頁 69-78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松井祐	4. 巻 24
2. 論文標題 五感を用いた素材の見分けに関する調査研究 - 造形教育の視点から -	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 0基礎造形024	6. 最初と最後の頁 47-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 松井祐
2. 発表標題 Impression 2018
3. 学会等名 日本基礎造形学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松井祐
2. 発表標題 Impression 2017
3. 学会等名 日本基礎造形学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 松井 祐
2. 発表標題 Impression 2016
3. 学会等名 日本基礎造形学会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考